

## 文学博士鎌田茂雄君の「宗密教学の思想史的研究——中国

### 華嚴思想史の研究 第二——」に対する授賞審査要旨

本書はその副題にある通り、鎌田茂雄君が先（一九六五年三月）に出版した『中国華嚴思想史の研究』の第二部なすもので、中国華嚴宗第五祖とせられる宗密（七八〇—八四二）の教学・思想の全貌を総合的に把握しようとするともに、その中国思想史上における意義を明らかにしようとする意図した著作である。そのために、まず宗密研究の資料批判を通して、その伝記と著書とを明らかにする。その教学・思想の特色と、それが後世の中国思想界、及び朝鮮半島の仏教と日本の華嚴教学に与えた影響などについて、著者の綿密な吟味を経た豊富な資料を縦横に駆使して論述する。その中でも、宗密の教学・思想を、当時の儒・仏・道三教との連関、及び仏教諸宗・諸派との関係にわたる広汎な展望のもとに、周到精密に究明した点は、本書の顕著な特色をなし、著者の苦心が明らかに認められる。

第一章序論においては、問題の所在を明示し、第二章では、宗密の伝記と著書とについて、関係諸資料を網羅して挙げつつ、一々について厳密な資料批判をなす。特に、宗密の円覚経関係疏・鈔等を通じて、著者が円覚経の訳伝や宗密以前の円覚経註釈書の検討に示した努力は特に見るべきものがある。円覚経の惟愨の疏の断片の拾収の如きその一つである。

第三章では、宗密における儒・仏・道三教について論ずる。ここで著者は初めに、南北朝末から隋唐時代にかけて道

教教理形成に及ぼした仏教の影響を述べる。次いで唐代の、仏教を批判した新儒学の代表者韓愈の説や、詩人王維、杜甫、柳宗元、白居易等における禅の影響等について説き、一方、三論の吉藏、天台の湛然、華嚴の澄観等が儒道二教に対する批判と包摂の態度を踏まえての宗密の三教観を、その著『原人論』を中心に論じている。なおその終りに、宗密が『原人論』において仏教諸宗を五種（人天教、小乗教、大乘法相教、大乘破相教、一乘顕性教）に分類していること、それを後の『禪源詮集都序』に説く三教（密意依性説相教、密意破相顕性教、顕示真心即性教）と対比して、宗密の教相判釈を紹介し、更に附節として、初期禅宗の老莊批判を紹介している。

第四章では、宗密の教禅一致説の形成、特に『禪源詮集都序』（以下『都序』と略称する）について論ずる。当時の中国の仏教は、教としては三論、法相、天台、華嚴などの各宗が、禅としては北宗と、南宗の牛頭、洪州、荷沢などの各宗派が相競うていた。しかし宗密はこれら諸宗派の中で、教としては華嚴を、禅としては荷沢禅を、最高最深のものとして、他の諸宗諸派の位置づけを行い、中国仏教諸宗派を包括しながら、それらを教と禅との一致という立場から統一しようとした。これが宗密の教禅一致説であるとする。なおここで著者は、宗密が教の三教即ち法相、三論、華嚴は、それぞれ実践仏教となれば、北宗禅、牛頭禅、洪州禅又は荷沢禅へと自ら移行する思想的必然性をもったものと観ていたとする。ちなみに、このの附節において著者は、『都序』の万曆本（朝鮮で万曆四年一五七六年開版のもの）と明藏本（大正藏経本の底本）とを比較しながら、万曆本の特色を明らかにしている点は、著者の資料吟味についての真摯な態度を示す一例である。

第五章では、宗密の禅宗史観を、その著『禪門師資承襲図』（以下『承襲図』と略称する）を中心に、先の『都序』と

後の『円覚経大疏鈔』などを参照しつつ論じている。ここで著者は宗密の禪宗各派についての価値判断を、著者自身の意見を殆ど加えないで、そのまま紹介している。章の終りに著者は『承襲図』と高麗知訥（一一五八—一二二〇）著『法集別行録節要並入私記』との対照表、並びに朝鮮晦菴定慧（一六八五—一七四二）著の『別行録私記画足』を附している。何れも中国華嚴教学と朝鮮半島の仏教との関係を見る上に貴重な資料である。

第六章では、中国禅思想形成の教学的背景を、『大乘起信論』を中心として論じている。その第二節で、初期禅思想史にあらわれた『起信論』を取り上げ、第三、四、五、六節では、それぞれ北宗禅、慧能系禅、牛頭系禅、馬祖系禅と起信論思想との関係を論じ、更に『起信論』の影響が『円覚経』『釈摩訶衍論』などの偽経・偽論を生み、それらに基づいて中唐において起信論的思考の影響が一層高まり、かくて宗密の思想の成熟となったとする。

第七章では、宗密の仏教儀礼について『円覚経道場修証儀』を中心に論ずる。宗密は『円覚経』を単に思想の対象として把握したのみではなく、その教説を実践行としてとらえ、これを観行として組織したのが彼の著『円覚経道場修証儀』であるとし、本書の内容の解説とその意義について考究を加えている。

第八、九兩章においては、日本の華嚴に及ぼした宗密の影響について論ずるが、初めに明恵上人の弟子証定（一一九四—一二五五—？）の著『禪宗綱目』に及ぼしている宗密の影響を述べ、証定は『承襲図』を含む宗密の諸著書や、中国における宗密の隔世の継承者というべき永明延寿（九〇四—九七五）の『宗鏡録』等によって説をなしているが、ただ宗密の『都序』はこれを恐らく見ていなかったのであろうとする。第九章では同じく宗密の影響を受けた日本の華嚴学者としての朗遊（一二六四—一二九五—？）の思想史的特質を論ずるが、ここではその著『華嚴香水源記』の五

教義を、同時頃の華嚴正系学者凝然（二二四〇—一三二二）の『華嚴五教建立次第』のそれと対比しつつ解明し、そしてそれが先の証定の『禪宗綱目』に依っていることを認めるとともに、更に、その頓教の解釈においては、溯って宗密に、特にその『都序』に依拠する所が多いとする。

以上、本書において明らかにせられた如く、宗密は、中唐における中国仏教学のしめくり役を果たし、中国思想史上比類なき巨匠であるが、それにも拘わらず、従来は、この人に関する研究は部分的に止まり、本書の如く広き視野に立って、諸方面から総合的に究明した著作は皆無に等しかった。本書によって学界多年の渴がいやされるに至った。その意味でも本書の功績は大なりと謂うべきであらう。